The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ショーペンハウアーとニーチェの読者としてのベルクソンの問題
Author(s)	アルノー, フランソワ; 小倉, 拓也
Citation	年報人間科学. 2010, 31, p. 65-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈翻訳〉

ショーペンハウアーとニーチェの読者としてのベルクソンの問題

アルノー・フランソワ
／小倉　拓也　訳

何よりもまず以下のことを明確にしておこう。つまり、「ベルクソンはショーペンハウアーとニーチェの読者である」ということについての探求だが、これは［彼らのベルクソンへの］影響についての研究とは関係がない、と。ベルクソンは、自身がドイツの哲学者から影響されたとは決して認めなかった。概して、彼の興味は英仏の哲学者に向いていて、彼はそれらをより実証科学に近いと判断していた。彼はこのことについてジャック・シュヴァリエに、その書物［原註（1）の書物］によって報告された話の中で、以下のようにいっている。「私は常に、あなたもお分かりだと思いますが、他でもなく実証主義者、つまりドイツ人ではなくイギリス人の門徒でありました。私が唯物論をまだ捨て去っていなかった時代においてさえ、ドイツ哲学の汎神論は決して私を魅了することはなかったのです」[1]。後で、私たちはこの話のさらに決定的で複雑な別のバージョンを読むことになる。

同様に、ベルクソンがドイツ語を読んでいたことも明確にしておこう。これを確認するためには、『物質と記憶』のページのいくらかの脚注を参照するだけで［十分で］ある。ベルクソンは、彼の著作のドイツ語翻訳について、このうえない詳細さをもって議論することさえできた。特に、彼のドイツの文通相手であったイザック・バンリュビとはそうであった（イザック・バンリュビへの一九〇九年七月二九日の手紙、C287-288）。

周知のとおり、およそ一八八〇～一九〇〇年のフランスでは、ショーペンハウアー哲学が流行した[2]。ベルクソンも例外ではなかった。ショーペンハウアーとベルクソンの教義を比較した論文[3]の著者である、アー

サー・O・ラヴジョイへの一九一一年の手紙の中で、彼はショーペンハウアーを「細かく」読んでいたと主張している（アーサー・O・ラヴジョイへの一九一一年五月一〇日の手紙、C410）。しかし、この手紙は、ショーペンハウアーについての別の話を含んでいる。ラヴジョイは、進化論者としてのショーペンハウアー――そこから彼の論文「進化論者としてのショーペンハウアー」のタイトルが由来する――を提示しようとしたが、同時に、ベルクソンが信じていたほどにはベルクソンからそう遠くないことも示そうとした。そしてこのことが、ラヴジョイがベルクソンに前述の論文を送ろうと決意した理由である。このフランスの哲学者［ベルクソン］は以下のように応じた。「私には、ショーペンハウアーはカントの「物自体」に催眠術をかけられたままであるように思われます。そして、彼の〈意志〉は、無時間的であり、言葉以上のいかなる意志も実際には持ちえないように思われます。このことが、私がそれを、また彼を、「すべては所与である」と考えるひとびとのうちに数える理由なのです。しかし、幸福な一貫性の欠如のおかげで、彼が自身の原理に固執しなかったのかもしれません」（同前）。このようないい方は、ベルクソンが常に、自身の哲学と先達の哲学との間に或る深い溝を見たがっていたことを証明している。たしかに、［ショーペンハウアーの］一貫性の欠如は「幸福な」ものであり、ベルクソンはそこで、ショーペンハウアーの一歩の前進を歓迎するのである。しかしながら、それは一貫性の欠如にとどまっている。すなわち、ショーペンハウアーの哲学は、まさにその根本からして、持続の完全な観念と無縁であるということである。確かに、この最後の側面こそ、ベルクソンの丁重な、しかし断固たる応答が強調する点である。多かれ少なかれベルクソンに近い多くのひとびとには、彼が［他の人の］作品について持っていた知識について語り合う機会があった。たとえば、特に、ジャンケレヴィッチ[4]、チボーテ[5]、アンドレ・ジューサン[6]などがそうである。ジューサンは、ショーペンハウアーをめぐってベルクソンと交わした或る会話にさえ触れている。彼がショーペンハウアー哲学への「賛美」[7]を語ったところ、ベルクソンは「確かに、彼［ショーペンハウアー］は問題を解くためのかなりの知を持っているが、彼には道徳的な資質が欠けている」[8]と答えた。何が「問題」になっているのかは分からない。この話は、非常に大きなひとつの結果をもたらすこともないし、非常に独創的というわけでもないけれども、ベルクソンが、彼と彼の先達との間に、誰も埋めることのできない或る溝を認めていたということを感じさせる。それは、理論についての溝だけではなく、全体として生の概念［そのもの］についての溝でもある。『変形者としてのショーペンハウアー』[9]を著したばかりのケイゼリンへの一九一〇年の手紙にも同様の指摘がある。

> 私［ベルクソン］は、あなたの『変形者としてのショーペンハウアー』を読んだばかりなのですが、この書物が私になした生き生きとした印象を、あなたに伝えたいと思います。まずもってそれは、非常に鋭い分析であります。あなたはショーペンハウアーを明らかにしてくれました。あなたは私たちに、内側から、歯車とバネ［les rouages et le ressort］を示してくれました（つまり［彼には］バネが欠けているといいたかったのです！）。あなたは私たちに、いかに

ショーペンハウアーが偉大な哲学者の資質のすべてを持っていたのかを分からせてくれました。ただ、それはたったひとつのことを除いてであり、それはおそらく本質的なことなのですが[10]（ケイゼリンへの一九一〇年三月一八日の手紙、C342）。

ベルクソンが、ショーペンハウアーを読むのに加えて、この著者［ショーペンハウアー］についての二次文献の一部も知っていたことは確かである――少なくとも一九一〇年以降、つまり、確かに『創造的進化』の三年後以降は――。しかし、彼がついでながらに挿入したその鋭い指摘は、とりわけ軽蔑をしるしており、ショーペンハウアーに、「偉大な哲学者」を認めることは不可能である。またしても、ショーペンハウアーには或る「資質」が欠けていた［とベルクソンはいっていた］が、発想の根本的な統一性のことでないとしたら、この「バネ」のイメージで与えられるものは名づけられてはいない。『音楽と無意識』と題されたアルベール・バザイアスの書物は、ベルクソンによって倫理学・政治科学アカデミーで紹介されたが（「A・バザイアスの『音楽と無意意識』についてのレポート」、M759-760）、それは、ショーペンハウアーとベルクソンとに同時に負っている。アンドレ・ジューサンは、一九一二年の論文――おそらくベルクソンによって読まれた――で、「バザイアス氏はベルクソンを経由してショーペンハウアーに影響を受けている[11]」と書くことができた。ショーペンハウアーとベルクソンについての研究は、ある時代には夥しい数であった。ベルクソンがそれらの大部分を読んでいたか、あるいは、ざっと目を通していたと想定できる。[12]『現代のルネッサンス』誌の主幹へベルクソンが送った手紙によって、ベルクソンがそのうちのひとつ、セルジュ・エヴァンスによるものを読んでいたことが知られている。「あなた方の雑誌が私に割いてくださった論文は、私にとって実に興味深いものでありました。私はセルジュ・エヴァンス氏に、もう少し時間がとれるようになったらお手紙いたします」[13]。研究者によると、重要な仲介は、リボーによってなされている。[14]ショーペンハウアーが翻訳されるよりさえ以前に出された本――『ショーペンハウアーの哲学』（一八七四年）――によって、彼はショーペンハウアー哲学のフランスへの主な紹介者のひとりである。ベルクソンがよくリボーを読んでいたことは強調するまでもない。ポール・ジャネは、フランスにおけるショーペンハウアー受容にとって決定的な論文の中で、ショーペンハウアーが、生理学に魅了された実験的な哲学者であることを示した。[15]この点は、他方ではジャネの読者であったベルクソンの関心を引いたに違いない（「ポール・ジャネの『形而上学ならびに心理学の諸原理』についての書評」、M375-410）。リボーの弟子でベルクソンとも非常に近い著者であるピエール・ジャネもまた、ショーペンハウアーに深い影響を受けていた。[16]ベルクソンがフランスにおけるショーペンハウアー受容の重要な書物を知っていたと想像することができるだろう。たとえば、ボッセルの書物（『ショーペンハウアー　その人間と哲学』、一九〇四年）[17]、リュイッサンの『ショーペンハウアー』（一九一一年）――ベルクソンは、フランス哲学についての一九一五年の彼のテクストの中で後者の名前を挙げている――、そしてフォコネの『ショーペンハウアーの美学』（一九一三年）、などである。[18]

以上のことすべてが、ベルクソンが自分自身をショーペンハウアーの後継者であるとみなしていた、ということを意味するわけではない。まったく逆である。ショーペンハウアーは、刊行された著作の中で三か所だけ言及されている。一か所目は「夢」（一九〇一年）の中にあるが、それはとるに足らないものであり、眠りの生理学についての問題に触れている（「夢」、ES91/883。cf.「夢」、M449）。他の二か所は「諸問題の位置について」（一九二二年）に見いだせる。［二か所目では、］ベルクソンは彼自身の直観を、シェリングおよびショーペンハウアーの直観と区別しており、［後者二つの直観は］簡単にいえば永遠なるものの直観へ近づけられ、そのようなものとして考えられている（「諸問題の位置について」、PM25/1271）。三か所目では、スピノザ、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、ショーペンハウアーは真理についての誤った理論を支持しているとして拒否されている。特にショーペンハウアーは、実在を単一の原理に還元してしまうという誤りと、実在をそれが最も関係のない原理すなわち意志へと還元してしまうという誤りを同時に犯している（同前49/1290。cf.26/1272）。これらの［ショーペンハウアー批判の］ほのめかしは、ほとんど隠されておらず、あまり穏やかなものではない。同情［la pitié］についてのショーペンハウアーの理論は、『試論』の中で即座に退けられており（E14/16）、滑稽なもの［le comique］は「知的なコントラスト」（R6/390）とは異なっている。これとは別の二つのほのめかしは、より広い射程を有している。

カント以降の哲学者は、機械論的な諸理論に対してどんなに厳しくなることができたとしても、機械論からひとつの科学という理念を、つまり、あらゆる種類の実在性にあてはまる同一の理念を受け入れている。そしてカント以降の哲学者は、それ自身がイメージしているよりも、ずっと機械論の教義に近いのである。というのも、物質について考えることにおいて、それが、機械論が想定してきた複雑さの継起的な諸程度を、ひとつの〈理念〉の実在化の諸程度によって、あるいはひとつの〈意志〉の客観化の諸程度によって置き換えるからであり、それがさらに諸程度について語るからである。そして、その諸程度とは、存在が唯一の方向へと進んでいくような或る梯子の諸段階［程度］のことである。（EC361/801）

そしてすぐ後に、ベルクソンはカント以降の哲学者たちの「非時間的な経験」（EC362/801）を批判する。『創造的進化』以来、「諸問題の位置について」において導入されることになる二重の批判が見いだされるだろう。［その中で］ショーペンハウアーは、面白おかしくヘーゲルに結びつけられており、真理についてまさにベルクソンが洗練しようとしていた理論と矛盾している。［ベルクソンが批判するショーペンハウアーの］真理とは、実在性の論理的支柱であり、また、［そこには］科学についての或る唯一のできあがったシステムがある。それがその発見よりも前に存在していた限り、そのシステムは永遠であり、唯一非時間的な経験――シェリングあるいはショーペンハウアーの直観――だけが達することができるであろう。カント以降の哲学とベルクソンの哲学は、それら各々の一貫性において相容れることのない、真理についての二つの

理論を示している。真理についてのカント以降の概念から、実在性についての或る教義が派生する。［それによると、］実在性は非時間的な諸要素から成っており、また、進化とはそれら諸要素のひとつの再構成でしかありえない。それは諸程度によってなされるのであって、突然の跳躍によって、あるいは本性の諸差異にしたがってなされるのではない。『二源泉』において導入された主知主義についての批判は、ニーチェに対してのものでありうるが、『創造的進化』以来存在している。戦時中に受けた剽窃の攻撃によって、どんなに少しばかりいらつかされたとしても[19]——少なくともチボーテの本によって[20]、彼がその知識を持っていたと想定することができる——、ベルクソンは『二源泉』において、「純粋な「生きることを‐欲する」概念のような、剥き出しの概念」（DS120/1073）としてのエラン・ヴィタールのイメージと、ショーペンハウアーの哲学のような「不毛な［生命を欠いた］形而上学」（同前）から、彼自身の哲学を区別している。

一九〇六年から一九〇七年の意志についての諸理論の講義は、ショーペンハウアーへの参照を含まずにはいられなかった。しかし、それらの参照は十分に展開されなかった。ショーペンハウアーは「意志がすべてである」（「意志についての諸理論」、M706）とする立場であり、「意志などなんでもない」（同前）とする機械論者と対比される。ベルクソンは、彼自身の教義を、それら二つの立場の間に位置づけようとする。少し進んで、彼はショーペンハウアーの理論を、その生得的で不変的な性質について批判する（同前、716-718）。それは、そのプラトン主義的、プロティノス主義的、カント主義的な起源へと、つまりベルクソンの言葉でいえば、その主知主義的な起源へと関連づけられる。戦争についての或る言説は、ショーペンハウアーについての以下のような言及を含んでいる。

> ドイツは、決定的に餌食の国民になったときには、ヘーゲルを持ちだす。あたかも、道徳的な美しさに夢中になっているドイツが、自分がカントに忠実であると言明してきたかのように。また、感傷的なドイツが、自分をヤコービあるいはショーペンハウアーの記憶のもとに位置づけてきたかのように（「倫理学・政治科学アカデミーの公会議における言説」、M1113）

もしこういってよければ、この話はいくつもの意味の層を含んでいる。まず、ショーペンハウアーは、ヤコービの傍に名を挙げられ、ロマン主義哲学者として紹介される。彼の哲学は、ビスマルクによって倒錯させられたドイツ人の好戦的な意図を培うことはできない。「感傷的な」という形容詞の使用は、「フランス哲学」と題されたほぼ同時代の或るテクストに見いだされるものに近づけられうる。後でそれについて検討しよう。さしあたっては、そのような語彙にしたがって以下のようにいっておこう。つまり、ショーペンハウアーは、ベルクソンと同じ偉大な哲学の潮流に関わっていて、ヘーゲルによって代表される主知主義の潮流と対比される。概して、われわれは、どちらかといえばショーペンハウアーに好意的な話に関わっている。想像されるとおり、ここでの狙いは、とりわけ政治的である。フィリップ・スーレーズは、その一節について、以下のように書いている。「ショーペンハウアーもヘーゲルも、政治的

に中立な著者ではない。ショーペンハウアーは、ドイツの統合に反対しており、親オーストリアだった[21]。結局のところ、とりわけヴントによって戦争のはじめ頃にベルクソンに対してなされた、いくらかの言明に答えているということができる[22]。ヴントのいうところでは、ヨーロッパ文明とは、その本質からして、ドイツ的である[23]。ヴントが再びとりあげた剽窃の非難とは、その主張を証明するための機会にすぎないだろう。ベルクソンは、ヴントの議論それ自体をひっくりかえすだろう。つまり、ヨーロッパ文明がドイツ的であるということを証明するために、ベルクソンとショーペンハウアーの教義の間の類似を引きあいにだすことはできないのであり、それというのも一九一四年のドイツ文明はショーペンハウアーとは何の関係もないからである、と。

同じ種類の指摘が、「フランス哲学」に見られる。フランス哲学を特徴づける輪郭とは、その心理学との結合である。これは、「自分自身を調べる傾向性、そして他者の心へと共感的に入り込む傾向性」から成る（「フランス哲学」、M1185）――つまり、大部分は、直観の傾向性から成る。この点において、フランスなるものはドイツなるものと根本的に区別される。「ドイツの偉大な思想家たち（ライプニッツにせよ、カントにせよ）は、心理学的な感覚をほとんど持たなかったか、あるいは、いずれにしても表明しなかった」（同前）。ニーチェにおいても、いくらかのよく似た言明が見いだされることに注意しよう（EH、「ワグナーの件」、§3）。しかし、ベルクソンは以下のように続ける。「ショーペンハウアー（そもそも、そっくり一八世紀のフランス哲学に深い影響を受けている）は、おそらく、心理学者であった唯一のドイツの形而上学者である」（「フランス哲学」、M1185-1186）。ここでもまた、ショーペンハウアーを、いくばくかドイツの伝統から逃れさせることが問題となるのであり、この言明はまったくもって敵対的なものではない。「心理学」という言葉は、ショーペンハウアーの場合、以下に続く三つの意味を持っているように思われる。まず、「心理学」という言葉はモラリスト特有の身振りを指し示しており、自分自身と他者の固有の行動の諸動機を明らかにすることに存する。次に、その言葉は、未だ萌芽的であった実証的な心理学へのショーペンハウアーの関心を参照させる――ベルクソンは、おそらくショーペンハウアーによってたびたび用いられていた神経システムに関するビシャとカバニスの探求のことを念頭においている。最後に、おそらく、その言葉はまさしく直観的な傾向性を連想させる。ショーペンハウアーとベルクソンの直観は、この限りにおいて、ベルクソンが他のテクストでいっているほどには違わない。われわれの知るところでは、ベルクソンの最後の発言は、ショーペンハウアーについてのものである。それはジャック・シュヴァリエに送られ、われわれが引用したばかりの本に収録されている。一九三八年三月二日［の手紙］：

> たとえ私が唯物論をまだ捨て去っていなかった時代においてさえ、汎神論は決して私を魅了することはなかったのです。フィヒテは、アグレガシオンのために勉強しましたが、私の気に入ることはありませんでした。唯一、ドイツ人の中で、ショーペンハウアーは気に入りました。おそらく、彼がフランスとイギリスの心理学者たちに学んでいるからです……[24]。

ベルクソンの著作における「汎神論」という言葉の登場は、われわれに以下のことを示している。つまりそれは、ここで、世界に対して唯一の原理あるいは本質を与えるための或る哲学的な態度に関係している、ということである（「諸問題の位置について」、PM26/1272）。この原理は、真理の体系の基礎にある。「汎神論」とは、それゆえ、ベルクソンが拒む真理の理論と関連している（「ラヴェッソンの生涯と業績」、PM239-240/1440）。哲学史においては、「汎神論」はフィヒテ、シェリング、ヘーゲルによって代表される（「ラヴェッソンの生涯と業績」、PM239-240/1440。cf.「諸問題の位置について」、PM48-50/1290-1291）。汎神論は、奇妙な仕方で、唯物論と結ばれた部分を持っている。つまり、それは思想の同じ主知主義的潮流から生じているのである。実在性は、その非時間的な諸要素――或る唯一の原理のまわりに組織化される――へと解消されるよう試みられ、それら諸要素は、次に実在性を再発見するために、それら諸要素の間に構成される。それゆえ、『創造的進化』の諸分析がここで繰り返されている。ショーペンハウアーは汎神論に関連づけられているのだが、しかし、またしても心理学者であるということで、他の「汎神論者たち」から区別される。より厳密には、彼は「フランスとイギリスの心理学者たちに学んでいる」のである。ここで再び、ビシャとカバニスに注意が払われる。イギリス人にとっては、リード（MVR、補論Ⅱ「直観的認識と悟性の理論についての補論」692。補論Ⅳ「ア・プリオリな認識について」710）と彼の弟子トーマス・ブラウン（QR Ⅱ 177）が重要であるように思われる。

このことすべてから、ショーペンハウアーからベルクソンが或る強固な認識を持つようになったと思われる。ベルクソンは、彼自身の教義と先達の教義との間に、とりわけ心理学については、いくらかの類似を認めていたのである。しかし彼は、少なくとも極めて重大な二つの点に関して、先達の教義と正面から対立している。すなわち、意志についての理論と、とりわけ、真理についての理論に関してである。

ニーチェの場合は、少しばかり異なっている。ベルクソンは常に、ニーチェ哲学から隔たりつつも注意を保っていて、彼がそこで持っていた認識はおおざっぱなものであるように思われる。つまりその認識とは、ニーチェの最初のフランスへの受容に伴っていた偏見――一方で本質的にゲルマン人［teuton］、汎ゲルマン主義者であるニーチェ、他方で「強いものが弱いものを駆逐する」[25]ニーチェ――というものである。ベルクソンの周囲に、彼にニーチェを理解させうるような人々がいなかったわけではない。たとえば、ジョルジュ・ソレルは公前と二重の影響を認めていたし、コレージュ・ド・フランス教授のジョゼフ・バルチとその兄弟ジャンがこのドイツの哲学者を読んでいたし[26]、シャルル・デュ・ボスとエドゥアール・ドレアン[27]もそうである。ジャンケレヴィッチもニーチェを知っていた[28]。輪を広げてみると、シェーラー、ジンメル、イタリアのパピニ[29]――『哲学の黄昏』[30]の著者――が含まれる。パピニは、ベルクソンが会って少しばかり連絡を取っていた人物である（パピニへの一九〇三年一〇月二一日の手紙、M604。パピニへの一九〇七年夏の手紙、M736。パピニへの一九〇九年五月五日の手紙、C261-263）。ベルクソンにソルボン

ヌの教授であったシャルル・アンドレ――ベルクソンが「フランス哲学」の中で哲学史家として言及している（M1177）――との職業上の関係があったか、そうでなければ、彼がアンドレの偉大な書物を読んでいたと想定することさえできる。[32] あるいはさらに、ベルクソンはしばしば、哲学のフランス協会で、フランスにおけるニーチェ受容の中心人物のひとりであるフィエ（『ニーチェの反道徳主義』一九〇二年）の傍に座っていた（「哲学のフランス協会における議論」、M774）。ベルクソンは、彼の著作の中で三度フィエに言及している（E120/106。102/240 note 3。「「生者の幻」と「心霊研究」」、ES117/903）。フィエは、ジュール・スゴンによれば、エラン・ヴィタールと、力への意志と、「グイオのいうところの集中した［強度的な］生と拡散する［外延的な］生」[33]の間の三つの関連づけを示した。ベルクソンは、スゴンのこの著作を読んでいる。[34] 彼自身、ベルクソン的な自己による自己の創造と、ニーチェにおける「深遠なる永遠の意志」[35]との関連づけを示唆している。しかし、彼は［その関連づけについて］展開してはいない。ベルクソンは、最初のフランス人ニーチェ読者のひとりであるダニエル・アレヴィ（『フリードリッヒ・ニーチェの生』一九三三年）を知っていた。また同様に、おそらく、若きジュヌヴィエヴ・ビアンキ[36]の仕事（『フランスにおけるニーチェ』一九二九年、『ニーチェ』一九三三年）、フェリシアン・シャレ[37]――シャレは、同様に、『ベルクソン』（一九二九年）の著者でもある――の著作（『ニーチェ』一九三三年）、ティエリー・モルニエ[38]の著作（『ニーチェ』一九三三年）、最後に、ルイ・ヴィアル[39]の著作（『ニーチェの苦悩』一九三三年）などを読んでいた。これらの著者の中で何人かは、［ベルクソンとニーチェの］二つの教義の比較を素描している。たとえば、ジャンケレヴィッチ[40]、シェーラー[41]、ジンメル[42]、アンドレ[43]など。ベルクソンは、それゆえ、自身の哲学とニーチェの哲学との確かな類似を知っていた。ベルクソンが哲学のフランス協会によって知った（「哲学のフランス協会への出席」、M627）ルネ・ベルトゥロについてはいうまでもない。ベルクソンは彼を重要な哲学史家のうちに数えており（「フランス哲学」、M1177-1178）、また、少なくとも『ベルクソンにおけるプラグマティズム』［の巻］については読んでいた（フランク・グランジャンへの一九一三年八月二二日の手紙、M1025）。概して、ベルクソンが生前、二人の哲学を関連づけたすべての著者の著作を読んでいたと想像してもさしつかえないだろう。たとえば、リジー・スーザン・ステブング[44]、クルト・ヒルデブラント[45]、オットー・フェニケル[46]、パール・ホニヒスハイム[47]など。まさに、われわれが参照したばかりのテクストの大部分が、『創造的進化』の後、さらに『二源泉』の後に出版されたのである。[48]

ベルクソンがニーチェの名を挙げる作品のテクストだけを読むと、彼が先達［ニーチェ］をよく知らなかったということ、そして、彼がその哲学をあまり評価しなかったということが明らかになる。人間の社会には、或る同種二形性［dimorphisme］がある。しかし、

> その同種二形性は、人間を還元不可能な二つのカテゴリー、すなわち、生まれながらの首長と臣民とに分けることはない。ニーチェの誤りは、このような種類の分割を信じたことであった。その種類とは、一方は「奴隷」であり、他方は「主人」である。（DS296/1212）

上記のテクストは、ニーチェの作品の読解が、たいへん深いとか、たいへんオリジナルだとかいうことを証明してはいない。そのかわり、『二源泉』の残りの部分と非常に一貫している。すなわち、知性が人間の本質であるということと、それを欠くということは、ニーチェがしたように、本質という観点から人間と他の動物との間の同一性を確定することである、と。また、それは、動物の同種二形性を真似て人間の同種二形性を思い描くことであり、ベルクソンがいうところでは、これを本能という観点から特徴づけることであり、人間の首長と臣民との間に「還元不可能な」差異線を引くことである。それは主知主義者――主知主義とは、ベルクソンによれば、知性に対する反対である――の誤りである。すなわち、動物から人間へと、進化は感覚不可能な移行によってなされ、すべては初めから与えられている［決定されている］という誤りである。ベルクソンによれば、ニーチェはまさに主知主義の哲学者なのである。実をいえば、『二源泉』にはニーチェの二回目の登場がある。しかし、それはほのめかしというかたちでなされている。それは、エルネスト・セイエールの話に含みを持たせる場面である。そしてそれを、ベルクソンは以下に続くような仕方で再現している。つまり、「帝国主義」とは概して「神秘主義」になる」（DC331/1239）、と。［これについて］ベルクソンは以下のように答えている。

もしも真の神秘主義に固執するなら、それは帝国主義とは両立しえないと判断されるだろう。われわれが述べたばかりのように、神秘主義は、非常に特殊な「力への意志」を促進することなしには拡大されえない、といえる程度である。それは、まさに人間が人間に対して強力な支配権を持たなくするために、人間に対してではなく、事物に対して及ぼす支配権である（DS332/1240）

ここでベルクソンは、彼の機械論の分析に立ち返る。この機械論は、開かれたものの秩序に属していて、神秘主義者によってかきたてられている。それは、人間が［封建的な］土地から離れることを可能にした（DS324-331/1234-1239）。ベルクソンのいう「力への意志」は、きわめて厳密に、事物に対する自分たちの影響力を広げるために人間によってなされた努力に存する。それとは違い、ニーチェのいう力への意志は、それによっていくらかの人間たちが他者に対する自分たちの支配を確実にしようとしてきた努力のことである。以下のことに注意しよう。すなわち、ベルクソンのいう「力への意志」は、ハイデガーが、まさにニーチェ的な力への意志であるとは認めなかったものと類似する[49]ということを。ここでさらに、ベルクソンがニーチェ哲学から得た理解は、おおざっぱで独創性に欠けるように思われる。しかしながら、われわれが読んだばかりのテクストの部分的な説明は、ジャック・シュヴァリエに一九三八年三月二日にだされた話の中に見いだせる。それは『二源泉』の何年か後である。

このようなわけで私は、真の超人は神秘主義者であるという結論へと至ったのです。しかしながら、ニーチェが見たものとは逆にで

す。力への意志、それは存在します。しかしそれは、彼が用いている意味においてではまったくありません。神秘主義者は、超人性［surhumanité］への意志を持っているのです。彼は、人間一般よりはるかに上にいると感じますし、また、感じるのはもっともなのです。しかし、それはそこで、いかなる高慢さ［orgueil］も持つことはありません。というのも、自分自身がとるに足らないものであると感じるからです。こうして、それは謙虚さの頂点を、高慢の頂点に結びつけるのです。キリストにいたっては、それ以上なのです。(50)

最初のフレーズは、『創造的進化』における「超人」と『二源泉』における「神秘主義者」との間の、最も明白で最も決定的な同一視を含んでいる。この話は、特に注意深い説明を要求する。その筋は、「力への意志、それは存在します」という命題である。この命題は、少なくとも部分的には、ニーチェ哲学についての十分に根拠のある賛同である。ベルクソンは直ちに［ニーチェとの］距離を強調する。さらに、ベルクソンが断定することは、ニーチェがいったことと「逆」である。ベルクソンが存在者の中に位置づけることを受け入れる「力への意志」とは、いったいどこに存在するのか。それは、「超人性への意志」にである。ベルクソンが自身のニーチェ哲学の拒否に与えるのと同じ形式において、一致もまた認められ続ける。相違点は、厳密に、「高慢」という考えから成り立っている。ベルクソンによれば、ニーチェの超人は高慢な者であり、ベルクソンは、ここでさらに、当時流布していた偏見にしたがう。ベルクソンにとって、「高慢な」者とは何か。その反対は、「人間一般よりはるかに上にいると感じますし、また、感じるのはもっともな」者である。デカルトの語彙によれば、それは、厳密に、高邁な［généreux］者である。(51) ベルクソン自身が、神秘主義者を描くために、この言葉を採用している（「意識と生命」、ES25/834）。彼はそれを、ラヴェッソンの『哲学的遺言』に対して再びとりあげており（「ラヴェッソンの生涯と業績」、PM286-287/1477）、デカルトの語彙のラヴェッソンによる使用を批判している（同前、287/1477）。逆に、高慢な者とは、「人間一般よりはるかに上にいる」と勘違いして感じる者である。ニーチェの力への意志は、それゆえ、他者に対して、野蛮な、そして不当であると分かっている支配を及ぼすために、いくらかの人間たちによってなされる努力から成る。この説明は、先のテクストが与えた説明とあまり変わらないし、ベルクソンはここでまた、当時一般的に受容されていた説明とそうは隔たらない。ベルクソンは或る神学的な考察をつけ加え、それによってニーチェからよりいっそう離れる。つまり、高邁な者――超人あるいは神秘主義者――は、「自分自身がとるに足らないものである」と「知っている」者であり、というのも彼はそれを「感じる」からである。ここに、その「謙虚さ」がある。ニーチェの超人は、謙虚さを欠いている。結局のところ、ニーチェは、おそらく、キリストが超人よりも上に位置づけられていることを受け入れないであろう。こうして、彼はマルヴィーダ・フォン・メイゼンブーグに以下のように書いている。

あなたは――この点について私はあなたを許しませんが――、私の「超人」という観念をあなた自身の使い方で用い、「優れた詐欺」の

一種に成功しました。それは、〈シビラ［巫女］〉と預言者との間に位置づけられる何かです。私の書いたもののあらゆる真面目な読者が、私に対して嫌悪をおこさせないようにするには、或る人間のタイプがまさにかつての理想的な偶像に反したタイプである以外ではありえない、ということを知っていなければならないのにですよ。そのタイプは、キリストのそれより、チョーザレ・ボルジアのそれに何倍も似ているのですが。[52]

ベルクソンがシュヴァリエへの話の中で認めた力への意志は、『二源泉』において彼が主張したそれとは少し異なっている。シュヴァリエへの話では「超人性への意志」が問題であり、『二源泉』では技術の支配への意志が問題であった。しかし、物質に対する技術の支配が、ベルクソンにおいては、自分自身の種だけによって構成される超‐人性への人間性からの止揚の条件である限りで、前者は後者と一致するのである。

『論集』［Mと表記してきた未邦訳の *Mélanges*］には、ニーチェの二回の登場がある。イザック・バンリュビへの手紙には以下のようにある。

私は多大な関心を持ってあなたのニーチェとルソーについての論文を読みました。それは私どもに、一般に思われているのよりも否定ばかりするのでない、よりパラドックス的でない、そしてよりルソーに近いニーチェを示してくれました。[53]（イザック・バンリュビへの一九一〇年六月一四日の手紙、M832）

別の機会に、ベルクソンは流布していた偏見に賛同している。ニーチェは「否定ばかりする」哲学者であり、いわば、本質的に、破壊者である、と。そして、彼が破壊するものとは、一般に受け入れられている諸価値であると思われる。［しかし、］ニーチェは自分でこの点について説明している。つまり、彼の最も固有の姿勢とは肯定であり（EH、「ツァラトゥストラはかく語りき」§6、314）、彼の著作のいくらかはその唯一の姿勢を達成している（EH、「曙光」§1；「悦ばしき知識」）。同様に、ニーチェは「パラドックス的な」精神の持ち主でもある。このことは、三つのことを意味しているように思われる。すなわち［第一に］、彼は、世間に受け入れられた意見に対して反対する趣味を持っている。このことから［第二に］、根拠はないが、しかし、受け入れられた意見に対する辛辣さによって輝くような話に執着する傾向がある。最後に、そうした種類の話に最も相応しい形式は、アフォリズムであり、それはニーチェによって――ベルクソンによってではなく――愛されている。しかしながら、ベルクソンはその偏見をこのようなものと認識している。実際、われわれはニーチェに対して最も好意的なベルクソンの言葉を引いたばかりである。そして、そうした言葉においてさえ、ニーチェへの同意は控えめなものでしかない。ニーチェを純粋な否定ばかりする者としながら、そして場合によっては暴力的であるとしながら、ベルクソンは、先達［ニーチェ］の哲学が、再びとりあげられうるような対象ではないと暗に示している。『論集』の中の他のテクストがこの分析を裏づけている。一九一五年に――つまり戦争の真っただ中に――フランス哲学について起草した報告の中で、ベルクソンは以下のように書いている。

ニーチェより有名ではないが、グイオは、このドイツの哲学者よりも先に、より慎重な言葉で、そしてより受け入れ可能なかたちで、以下のように主張した。すなわち、道徳的な理想は、生の最も高度なありうべき発展において探求されなければならない、と。（「フランス哲学」、M1180）

文脈が検討される必要がある。少しばかりその筋を歪めながら、われわれは以下のようにいっておこう。つまり、ベルクソンにとっては、フランス哲学が、それ自身以外には、とりわけドイツ哲学には負うところがないということ（同前1157-1158）、そして、そのドイツ哲学が、逆に、かなりの程度フランス哲学に依存しているということを確証するのが重要なのである、と（同前、1159、1165、1170）。こうして、「フランスの精神は、哲学の精神と同じものでしかないのである」（同前、1189）。しかしながら、フランス哲学のただ中で、二つの流れを区別するのがよいだろう。ひとつは、「合理主義」（同前、1160）が刻まれており、その起源をデカルトに見いだす。もうひとつは、広い意味で「感情的」（同前）で、パスカルに由来している。ベルクソンによれば、同じ対立が、百科全書派とルソーの間に見いだされる（同前、1165）。ところで、この対立は、大部分は、ベルクソンが自身で認めるように、知と直観の間の対立である（同前、1160）。ベルクソンは、彼自身の哲学を、ひとつ目の流れから完全には区別することなく、二つ目の流れに位置づける。そして、グイオが属するのは、二つ目の流れである。したがって、ベルクソンがここで行っているのは、少なくとも部分的には、ベルクソン自身の哲学とニーチェ自身の哲学とを近づけることである。グイオとニーチェの比較は当時ありふれていた。この比較は、グイオの義父であるフィエによって、そのニーチェについての書物の中で深く掘り下げられている。ジャンケレヴィッチはそれを引き継ぐだろう。[54] この比較が正当化されようがされなかろうが、それは受容のひとつの事実であり、フランスにおけるニーチェ受容に属している。ベルクソンがこの比較を引き継いでいるのは、したがって、驚くべきことではない。問題になっている一節にある「発展［expansion］」という考えは、グイオに固有のものである。ベルクソンは、ニーチェを、当時しばしば主張されたように一人の詩人ではなく、一人の「哲学者」にする。しかし、彼は二つの批判を提出する。「ひとつ目の点は、「節度」の欠如、いわば、厳密に哲学的な資質の不在である。問題なのは、或る仮説を徹底的に追って、［それを］別の仮説と交差させ、実在の分割を再発見しようとしないことである（「良識と古典学習」、M359-372）。ニーチェの高慢さ［ὕβρις］は、とりわけ、社会的、道徳的な慣例の拒否という形象をとる。ここから、二つ目の点がでてくる。すなわち、ニーチェが彼の思想に与えた「形式」は、ほとんど「受け入れ可能」ではないという点である。改めて、それは趣味で反対し、それゆえに、破廉恥な話に執着しようとする、そうした意志に関わっている。しかし、その「形式」は、同様に、文学的な形式である。もしベルクソンの話が二つ目の意味を含んでいなかったとしたら、この話は少なくとも冗長なものになってしまうだろう。結局のところ、ベルクソンはニーチェに「名声」があるとする。そこで或る事実――もっとも、十

分にははっきりしていないのだが――の認識を見ることができるであろうが、しかし、同様に、或る隔たりの証拠も見ることができるだろう。ニーチェは、パラドックスの著者でありうる、といった具合によく知られているのかもしれない。いずれにせよ、ニーチェがひとつの「理想」であるとしながら、ベルクソンは、彼がドイツの先達［ニーチェ］について深い読解をしなかったと思わせておく。

ニーチェについての、ベルクソンの先ほどの二つのテクストは、シュヴァリエによって報告されたいくらかの話から成る。一九二六年一二月三〇日［の手紙］：

私はベルクソンに、タマンが彼について私にいったこと、すなわち、ニーチェ的な意味における生き生きとした運動に内在する本能あるいは力の称揚へ向けての、ベルクソンの思想のありうべき引き伸ばしについて語りました。ベルクソンは私に答えてこういったのです。「それは数年前にロドリーグが私について書いたことです。私は彼にこう答えました。あなたの本は才能に溢れていますが、それは私の思想とまったく逆です、と。私の場合、道徳的な秩序は、完全にそして絶対的に新しい秩序なのです。それは、進化的運動の単なる引き伸ばしではまったくありません。そうでなければ、私が二〇年も自分の道徳に精をだすのは無駄であったでしょう。それは、『創造的進化』の中に含まれていたはずです。実のところ、私は、私の『道徳』［『二源泉』のこと］が読まれるであろうときに、おい！　なんだ！　これだけのことか！　などといわれるのが恐いのです。そして実際、私はそこから、本当に、正確さと事実、そして事物の新しい表わし方を持って、常識へと戻るのです。[55]」

ギュスタヴ・ロドリーグの本とは、『ベルクソン哲学と道徳性』[56]（一九二一年）である。『二源泉』より前のこの話が、しかし、その著作が含んでいる分析の説明の開始を受けとることができると思われる。開かれたものとは、閉じられたものを構成する本能の再構成ではない。人間の本性は、それが知性である限りは、それ自体、自らを超克する原理を含んでいる。そしてベルクソンは、生命と呼ばれうる秩序に対する、道徳的な秩序の「絶対的な新しさ」を強調する。ニーチェの思想――或る「本能の称揚」――についてシュヴァリエによって与えられた風刺は、或るコンテクストの徴候を示すものであり、そして、なぜベルクソンが自分の哲学をそうした［ニーチェの］思想に近づけられるのを好まなかったのかを理解させる。しかし、そのように近づけることが当時行われていて、そして、ベルクソンがそれを知っていた、というふうに見られている。しかしながら、「道徳」を持って「常識」へと戻ると断言しながら、ベルクソンは、おそらく、彼自身がそうだとは思っていないよりもニーチェ的である。『二源泉』［のいわんとするところ］は、決して、人類に、彼らがしなければならないことを伝えることではない。新たな道徳は、古いものの、すなわち、閉じられた道徳の瓦礫の上に築かれるのではない。人類には、彼らがしなければならないことをいわれるような必要はない。というのも、人類は、少なくともその本質的なことに関しては、それを分かっているからである。そして、そこにはなんら哲学的な問題はない。

人類は、いかに自分たちが行動するかを知るために哲学者を待つ必要はなかった。多くの場合、習慣だけで十分なのである。哲学者は、「危険」であることはできないだろうし、また、彼は善悪の彼岸にいることができるのである。別の話が、以下に続くもの――それは一九三一年一〇月三一日、『二源泉』の刊行の何ヶ月か前にだされた――である。

> もっとも、私がその著作の中で言おうとしているのは、私が道徳の起源と根拠について考えざるをえなくなったことであり、すべきことではありません。ひとは私の道徳についていつも話しますが、しかし、私はひとつの道徳を与えようとしているわけではありません。私は自分が、ニーチェのように、そのひとつを創りだせるとは思っておりません……――神に感謝いたします！[57]

このテクストは前の部分と一致する。すなわち、哲学においては、「ひとつの道徳を与える」ことが問題なのではないのである。この話は、またもや、流布していた偏見に基づいている。それによると、ニーチェは「ひとつの道徳を発明」し、また、彼は、ひとつの道徳を発明したという事実によって、あらゆる哲学者の中で区別される哲学者でさえあるというのだ。ここで、或る奇妙なキアスムが見られる。ベルクソンが自身をニーチェから分かつことができると考えるのは、その教義が深くニーチェ的なものに似ている部分――すなわち、ひとつの道徳あるいは理想を提示することの拒否――によってである。［先の引用文の］最後の文句は、最終的な距離をとることを構成する。つまり、「神に感謝いたします」という表現がいかに慣用的であっても、それは反キリスト者の言動あるいは書くものには見られえないものである。

したがって、以下のように断言せざるをえない。つまり、ベルクソンはニーチェをよく知らなかった。また、彼がフランスにおける最初のニーチェ受容に結びついた夥しい偏見に依存していた。そして、ニーチェについて彼が知っていたことあるいは知っていると信じていたことから、自分自身は遠く離れていると感じていた。ニーチェとベルクソンの間で問題なのは、まさに、影響についてではないのである。

そこでしかし、もしベルクソン、ショーペンハウアー、ニーチェの哲学の間にいくらかの類似があるとすれば、それらは事象自体に由来するしかない。「哲学史の諸々の線」のような何かが確かに存在しており、それらは、その創造と同時に、必然性の様相の上に広がる。そしてその諸々の線が分岐すればするほど、それらの帰着点の間に見いだされる類似はますます驚くべきものになる。それらの諸々の線は、生命の進化の諸々の線についてではあるが、同じ議論の文脈の中でベルクソンが用いたイメージを使うなら――［たとえば］脊椎動物の諸々の線と軟体動物の諸々の線が、両者とも眼［の形成］に達するように――、「根源に認められる同じ衝動」（EC55）を感じさせるのである。

原註

（1）Jacques Chevalier, *Cadences*, t. II, *Voies d'accès au réel, principes de l'humanisme, images de France*, Paris : Plon, 1951, p. 75.

(2) Le volume *Présences de Schopenhauer*, dirigé par Roger-Pol Droit, contient un certain nombre d'indications sur la réception de Schopenhauer en France à l'époque de Bergson (Roger-Pol Droit [éd.], *Présences de Schopenhauer*, Paris : Grasset, 1989, p. 332.).

(3) Arthur Oncken Lovejoy, « Schopenhauer as an Evolutionist », in *The Monist*, t. XXI, n° 2, avril 1911, pp. 195-222.

(4) Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson* (1959), Paris, PUF, coll. « Quadrige », 1999, pp. 133-166.

(5) Albert Thibaudet, *Le bergsonisme* (1923), Paris, Gallimard, coll. « NRF », 7e éd., 1924, t. II, pp. 210-217.

(6) André Joussain, « L'expansion du bergsonisme et la psychologie musicale », in *Revue politique et littéraire. Revue bleue*, t. V, n° 24, 15 juin 1912, pp. 758-763.

(7) André Joussain, « Schopenhauer et Bergson », in *Archives de philosophie*, t. XXVI, n° 1, janvier-mars 1963, p. 77.

(8) *Ibid*.

(9) Hermann von Keyserling, *Schopenhauer als Verbilder* (1910), p. 127. « *Verbilden* » signifie déformer, défigurer.

(10) ベルクソンは、ケイゼリンへの一九一〇年二月一七日の手紙で、彼の著作を期待しているといっている（ヘルマン・フォン・ケイゼリンへの一九一〇年二月一七日の手紙、C331）。したがって［本文中の手紙が三月一八日のものなので］ベルクソンは、少なくとも一か月以内にこの著作を読んでいたことになる。

(11) André Joussain, « L'expansion du bergsonisme et la psychologie musicale », *ibid*., p. 759.

(12) ドゥーシェ図書館には、シリル・エドワルド・ミシャンソン・ジョードの論文がある（« The Problem of Free Will in the Light of Recent Developments in Philosophy », in *Proceedings of the Aristotelian Society*, t. XXIII, 1923, pp. 121-140 ; BGN 933/II-BGN-V-33）――ベルクソンは、一九〇四年から一九三九年にわたる *Proceedings of the Aristotelian Society* のすべての号を所有していた――、また、リジー・スーザン・ステブングの本もある（*Pragmatism and French Voluntarism, with Especial Reference to the Notion of Truth in the Development of French Philosophy from Maine de Biran to Professor Bergson*, Cambridge : University Press, 1914, p. 168 ; BGN 1101/IV-BNG-IV-115）――著者からベルクソンへの自筆の献辞が重要である。

(13) Lettre à [A. de Roux] du 6 septembre 1913, in C, 529. 問題となっている論文のタイトルは « La vie et l'intelligence » である。それは三部に分けて出版された : « I. M. Bergson et Schopenhauer », le 10 juin 1913 ; « II. M. Bergson et Schopenhauer », le 24 juin 1913 ; « III. La vie psychologique », le 24 août 1913.

(14) Hermann Bönke, « Wörtliche Übereinstimmungen mit Schopenhauer bei Bergson», in *Jahrbuch der Schopenhauer-Gesellschaft*, t. V, 22 mai 1916, p. 43 ; Günther Pflug, « Bergson und Schopenhauer », in *Schopenhauer-Jahrbuch*, t. LXIX (1988), p. 537.

(15) Paul Janet, « Schopenhauer et la physiologie française. Cabanis et Bichat », in *Revue des deux mondes*, Troisième série, t. XXXIX, 1er mai 1880, pp. 35-59. Cf. Anne Henry, « Proust lecteur de Schopenhauer : le nihilisme dépassé », in Roger-Pol Droit (éd.), *ibid*., p. 166.

（16）［Pierre］Janet, *Les obsessions et la psychasthénie*, Paris : Alcan, t. I, 1903, p. 488.

（17）この書物はドゥーシェ図書館にある。整理番号は BGN 955/II-BGN-V-70。

（18）奇妙なことに、［ショーペンハウアーの］『意志と表象としての世界』はドゥーシェ図書館にはない。

（19）Illés Antal, « Bergson und Schopenhauer », in *Jahrbuch der Schopenhauer-Gesellschaft*, t. III (1914), pp. 3-15 ; Hermann Bönke, *Plagiator Bergson, membre de l'Institut. Zur Antwort auf die Herabsetzung der deutschen Wissenschaft durch Edmond Perrier, président de l'Académie des Sciences* (1915), p. 47 ; Günther Jacoby, « Henri Bergson und Arthur Schopenhauer », in *Internationale Monatsschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik*, t. X (1916), pp. 454-479 ; Friedrich Klimke, S. J., « „Plagiator Bergson" – eine Kulturfrage », in *Stimmen der Zeit*, t. XC (1916), pp. 422-424 ; Hermann Bönke, « Wörtliche Übereinstimmungen mit Schopenhauer bei Bergson », *ibid.*, pp. 37-86 ; Wilhelm Wundt, recension de *Plagiator Bergson, membre de l'Institut. Zur Antwort auf die Herabsetzung der deutschen Wissenschaft durch Edmond Perrier, président de l'Académie des Sciences* par Hermann Bönke, in *Literarisches Zentralblatt für Deutschland*, t. LXVI (1916), pp. 1131-1138 ; Peter Knudsen, « Ist Bergson ein Plagiator Schopenhauers? », in *Archiv für Geschichte der Philosophie*, t. XXV (1919), pp. 89- 107. われわれはそれを保有していないのだが、二人のドイツの哲学者がベルクソンにいくらかの支持を送っている : Georg Simmel, « Bergson und der deutsche „Zynismus" », in *Internationale Monatsschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik*, t. IX (1914), pp. 197-199 ; Max Scheler, *Der Genius des Krieges und der Deutsche Krieg* (1914), in *Gesammelte Werke*, t. IV, p. 205. われわれの論文を参照することを許していただこう　« Bergson plagiaire de Schopenhauer ? Analyse d'une polémique », in *Études germaniques*, t. LX, p. 488.

（20）Albert Thibaudet, *ibid.*, t. II, p. 211.

（21）Philippe Soulez, *Bergson politique*, Paris : PUF, coll. « Philosophie d'aujourd'hui », 1989, p. 143.

（22）Wundt, *Über den wahrhaften Krieg* (1914), p. 18.

（23）*Ibid.*, pp. 3-7.

（24）Jacques Chevalier, *ibid.*, p. 280.

（25）Jacques Le Rider, *Nietzsche en France : de la fin du XIXe siècle au temps présent*, Paris : PUF, coll. « Perspectives germaniques », p.279.

（26）Édouard Dolléans, « L'influence d'Henri Bergson à travers les lettres françaises », in *Les études bergsoniennes*, t. II (1949), p. 233.

（27）*Ibid.*, pp. 230-233.

（28）*Ibid.*

（29）Jankélévitch, « Deux philosophes de la vie. Bergson, Guyau », in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, t. XCVII, n° 6, juin 1924, p. 402, 408, 420, 449 ; *Henri Bergson*, *ibid.*, p. 53, note 2 ; p. 96, note 1 ; p. 126, note 3.

（30）René Berthelot, *Un romantisme utilitaire. Étude sur le mouvement pragmatiste*, Paris : Alcan, coll. « Bibliothèque de philosophie contemporaine », t. III : *Le pragmatisme religieux chez William James et chez les catholiques modernistes*, p. 78.

（31）René Berthelot, *Un romantisme utilitaire. Étude sur le mouvement pragmatiste*, Paris : Alcan, coll. « Bibliothèque de philosophie contemporaine », t. III : *Le*

pragmatisme religieux chez William James et chez les catholiques modernistes, p. 78.

（32）*Nietzsche, sa vie et sa pensée* は、ジャック・ドゥーシェ図書館にはない。しかしそこには *Premiers principes métaphysiques de la science de la nature de Kant*, préfacé par Andler et envoyé, avec un autographe, à Bergson (BGN 353/II-BGN-III-12) の写しが一部ある。その写しは一八九一年のものである。

（33）Jules Segond, *L'intuition bergsonienne* (1912), p. 57, note 1.

（34）*L'intuition bergsonienne* は、ドゥーシェ図書館にある。整理番号は BGN 1093/IV-BGN-IV-107。著者からベルクソンへの自筆の献辞が重要である。

（35）*Ibid*., p. 143, note 1 ; cf. APZ, « Le deuxième chant de danse », §3, 249 ; « Le chant du marcheur de nuit ».

（36）Paul Honigsheim, « Taine, Bergson et Nietzsche dans la nouvelle littérature française », in *Zeitschrift für Sozialforschung*, t. III, n° 3, 1934, p. 413, notes 1 et 2.

（37）*Ibid*., note 3.

（38）*Ibid*., note 4.

（39）*Ibid*., note 5.

（40）Jankélévitch, « Deux philosophes de la vie. Bergson et Guyau », *Ibid*., p. 402, 408, 420, 449 ; *Henri Bergson*, p. 53, note 2 ; p. 96, note 1 ; p. 126, note 3. この論文は、ドゥーシェ図書館にある。整理番号は BGN 1812/VII-BGN-V-31。ただし、ベルクソンがこれほどそれを読むことができたかはよく分からない。

（41）Max Scheler, « Ethik. Eine kritische Übersicht der Ethik der Gegenwart » (1914), in *Gesammelte Werke*, t. I, p. 390 ; « Versuche einer Philosophie des Lebens » (1913), in *Vom Umsturz der Werte. Abhandlungen und Aufsätze*, t. II (1915), in *Gesammelte Werke*, t. III, pp. 313-339 ; *Erkenntnis und Arbeit*. Eine Studie über Wert und Grenzen des pragmatischen Motivs in der Erkenntnis der Welt (1925), in *Gesammelte Werke*, t. VIII, pp. 223-224 ; « Einleitung » (1925), in *Gesammelte Werke*, t. XII, vol. 3, p. 11 ; « Mensch und Geschichte » (1926), in *Gesammelte Werke*, t. IX, pp. 134-135, 139. « Versuche einer Philosophie des Lebens » は、初版 (Scheler, « Versuche einer Philosophie des Lebens », in *Die weißen Blätter*, t. I [1914], pp. 203-233) で、ドゥーシェ図書館にある。整理番号は BGN 1652/VII-BGN-III-56.

（42）Georg Simmel, *Philosophische Kultur. Gesammelte Essais* (1911), in Gesamtausgabe, t. XIV, pp. 162-163 ; « Henri Bergson » (1914), in *Zur Philosophie der Kunst. Philosophische und Kunstphilosophische Aufsätze von Georg Simmel*, Potsdam : Kiepenheuer Verlag, 1922, pp. 126-145.

（43）Charles Andler, *Nietzsche. Sa vie et sa pensée*, Paris ; Gallimard, coll. « Bibliothèque des idées », (1958), t. III ; *Nietzsche et le transformisme intellectualiste* (1922), *La dernière philosophie de Nietzsche* (1931), p. 227, 499.

（44）Lizzie Susan Stebbing, *ibid*., p. 1.

（45）Kurt Hildebrandt, « Medizin und Philosophie », in *Monatsschrift für Psychiatrie und Neurologie*, t. LIII, n° 1, 1923, p. 51.

（46）Otto Fenichel, recension de « Medizin und Philosophie » par Kurt Hildebrandt, in *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften*, t. IX, n° 3, 1923, p. 394.

（47）Paul Honigsheim, « Taine, Bergson et Nietzsche dans la nouvelle littérature française », in *Zeitschrift für Sozialforschung*, t. III, n° 3, 1934, pp. 409-415. この

論文はドゥーシェ図書館にある。整理番号はBGN 1863/VII-BGN-V-82.

(48) ドゥーシェ図書館は、ジュヌヴィエヴ・ビアンキの訳による『力への意志』の写しを一部所蔵している。しかし、後になって［写しではなく実物の本が］入荷された(Nietzsche, *La volonté de puissance*, trad. Geneviève Bianquis [1937])。整理番号はBGN 438/VI-BGN-III-97.

(49) Heidegger, *Nietzsche*, t. II, p. 310.

(50) Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Paris : Plon,(1959), p. 277.

(51) Cf. Descartes, *Les passions de l'âme*, §153-155.

(52) Lettre à Malwida von Meysenbug du 20 octobre 1888, citée in EH, « Pourquoi j'écris de si bons livres », §1, 278, note 1, 541.

(53) Cf. Isaac Benrubi, « Nietzsche und Rousseau », in *Frankfurter Zeitung*, 24 mai 1910.

(54) Jankélévitch, « Deux philosophes de la vie. Bergson et Guyau », *ibid*., p. 402, 408, 420, 449 ; *Henri Bergson*, p. 53, note 2.

(55) Jacques Chevalier, *ibid*., p. 79.

(56) この本はドゥーシェ図書館にある。整理番号はBGN 1088/IV-BGN-IV-102。ベルクソンへの自筆の献辞が重要である。

(57) Jacques Chevalier, *ibid*., p. 145.

訳者註

本文および原註内の［　］による挿入は、すべて訳者によるものである。また、論文内に引用されている文献については、ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』についてのみベルクソン著作集（中村雄二郎訳、白水社、二〇〇一年）を一部参考にしたが、基本的にすべて拙訳である。